

ビンナガ 南大西洋

Albacore, *Thunnus alalunga*

管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

生物学的特性

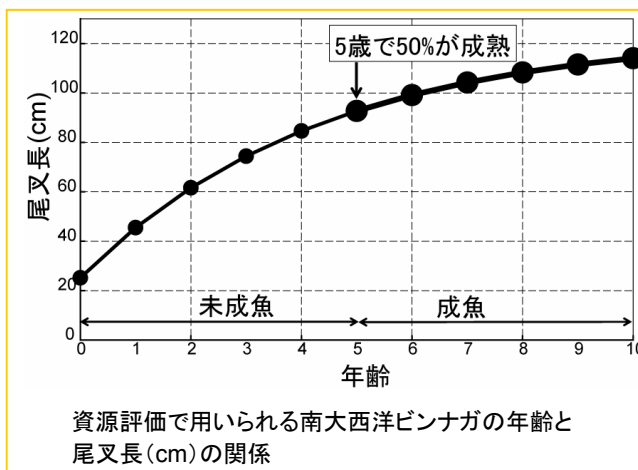
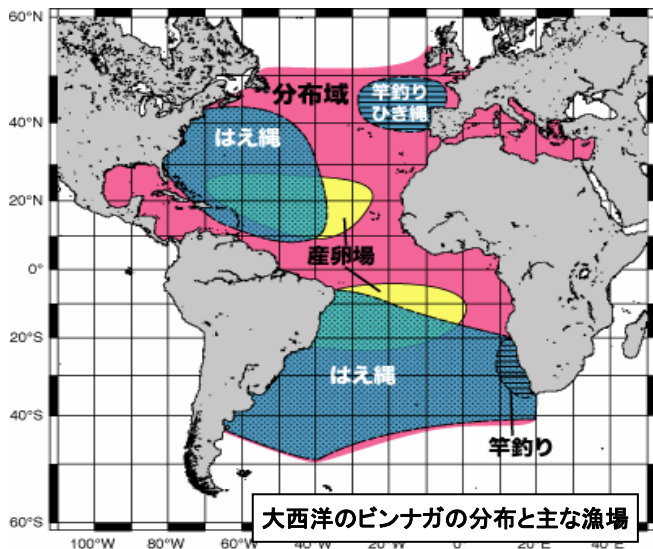
- 寿命: 10 歳以上
- 成熟開始年齢: 5 歳頃
- 産卵場: 南緯 10~25 度の南米大陸寄り
- 索餌場: 温帯域
- 食性: 魚類・甲殻類・頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類・さめ類、海産哺乳類

最近一年間の動き

ICCAT の SCRS 会合が 2006 年 9 月下旬から開催された。資源評価は実施されず、近年の漁業の変化および提出論文について論議された。次回の資源評価は 2007 年に予定されており、ここでこれまでとは異なる手法 (統合モデル) を用いて資源解析を試みることに合意され、そのためのデータの準備が各国で進められている。

漁業の特徴

南大西洋のビンナガは、台湾 (はえ縄漁業) および南アフリカ (竿釣り漁業) によって主として漁獲されており、ブラジル、ナミビアがこれに次ぐ。特に台湾のはえ縄の割合は高く、1973 年以降総漁獲量の 6~9 割を占めてきた。台湾のはえ縄漁業は伝統的にビンナガを主対象とした操業が行われており、亜熱帯から温帯域の広い海域で周年操業している。

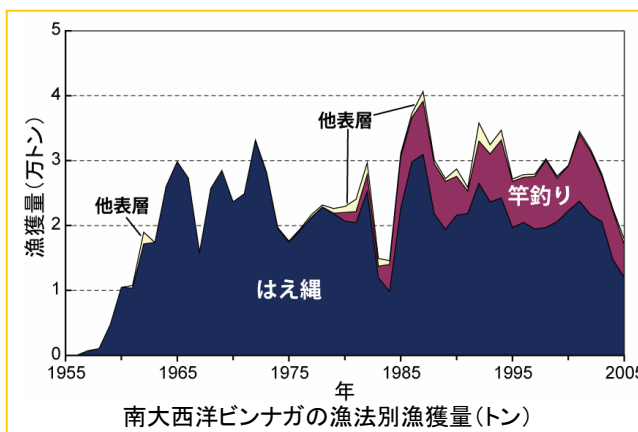


利用・用途

刺身や缶詰原料とされる。

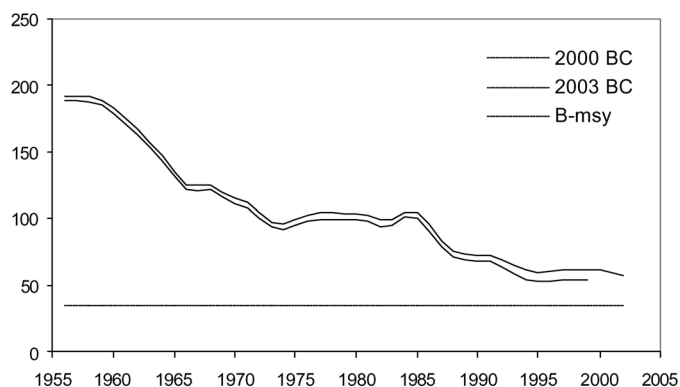
漁獲の動向

総漁獲量は 1960 年代~1970 年代にはおよそ 2.0~3.5 万トン、1986~1987 年には 3.7~4.0 万トンと歴史的に最も高くなり、それ以降はやや減少し、安定した。最近 5 年 (2001~2005 年) では 2.2 万~3.5 万トン、平均 2.7 万トンであった。2005 年の総漁獲量は 17,928 トンで 2004 年 (22,518 トン) から 4.5 千トン減少した。近年の総漁獲量の変動は表層漁業の漁獲量変動によるところが大きい。台湾のはえ縄による漁獲の減少も目立ってきている。



資源状態

MSY は 3.1 万トン、補充漁獲量 (Replacement yield、RY、資源量をそのまま一定値に保つような漁獲量) は 2.9 万トンと推定された。漁獲圧 (漁獲が資源に与える影響) は MSY を与えるレベルの約 6 割と推定された。親魚量は 1980 年代からかなり減少したが、近年はその減少の度合いが弱まり、2002 年でもなお MSY レベルを上回っている。



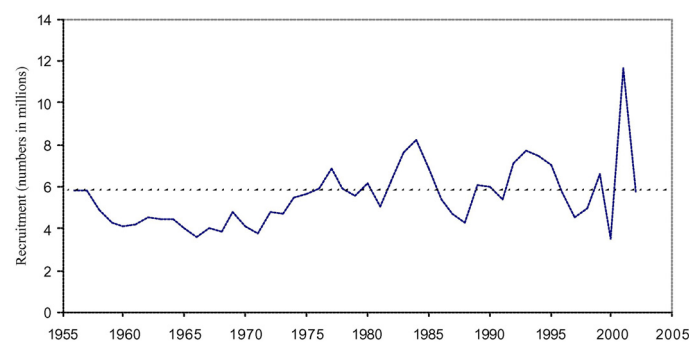
ASPM で推定された親魚資源量

上の折れ線は今回の、下は前回 (2000 年) の結果を示す。直線は B_{MSY} を示す。

(ICCAT 2005 SCRS Report より)

管理方策

2003 年の資源評価会議は、現状の親魚資源量を維持するには、今後 3~5 年は漁獲量が 31,500 トンを超えてはならないと勧告した。2004 年の行政官会議は、これまでの TAC を上方修正し 30,915 トンとすることを決定した。日本は、本資源の漁獲量を南大西洋のはえ縄のメバチ漁獲量の 4% 以下にすべく努力するというこれまで同様の規制を受けるとなっている。



SASPM (Statistical ASPM) によって推定された加入量

(ICCAT 2005 SCRS Report より)

資源評価まとめ

- MSY は 3.1 万トン、RY は 2.9 万トンと推定された。
- 漁獲圧は MSY レベルの約 6 割と推定された。

資源管理方策まとめ

- TAC は 30,915 トンで、国別クォータが設定されている。
- 日本は、ビンナガの漁獲量を南大西洋のはえ縄によるメバチ漁獲量の 4% 以下にするよう努力するという規制が課せられている。

ビンナガ(南大西洋)の資源の現況(要約表)

資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (2001~2005 年)	2.2~3.5 万トン 平均値 2.7 万トン
我が国の漁獲量 (2001~2005 年)	213~500 トン 平均値 351 トン